《2019 年 3 月（通算 271 回）月例会報告》

＊＊＊

サロン 2002 からのメッセージ②
－オリンピズムを教育に－

Ⅰ．大河ドラマ「いだてん」～スポーツ史考証の立場から

大林太朗（筑波大学体育系助教／オリンピック教育プラットフォーム運営委員）

Ⅱ．オリンピズムを教育に

中塚義実（筑波大学附属高校／NPO法人サロン2002理事長）

（特定非営利活動法人サロン 2002 広報誌『游 ASOBI』第 2 号 100～105 頁参照）

＊＊＊

【日　時】2019 年 3 月 27 日（水）19：00～21：10
【会　場】筑波大学附属高校３F 会議室（〒112-0012 東京都文京区大塚 1-9-1）
【テーマ】サロン 2002 からのメッセージ②　オリンピズムを教育に
　　Ⅰ．大河ドラマ「いだてん」－スポーツ史考証の立場から
　　Ⅱ．オリンピズムを教育に
【演　者】大林太朗（筑波大学体育系助教/CORE 運営委員）
　　中塚義実（筑波大学附属高/NPO サロン理事長）
【参加者（会員・メンバー）6 名】
梅澤佳子（多摩大学経営情報学部）、梅本嗣（(株)博報堂）、岸卓巨（日本アンチ・ドーピング機構）、小池靖（在さいたま市／サッカースポーツ少年団指導者）、清水絢子、中塚義実（筑波大学附属高校）
【参加者（未会員）16 名】
飯田祐眞（筑波大学大学院）、内田裕之（自由学園）、大竹口智也（(株)アンダーアーマー）、大林太朗（筑波大学／CORE 運営委員）、神谷隼人（株式会社オフィス神谷）、川島健司（読売新聞編集委員）、糀正勝（インタースポーツ株式会社）、鈴木崇正（NEC マネジメントパートナー）、田中康之（立川高校）、西祐貴子（筑波大学附属高等学校）、福島成人（ヨコハマ・フットボール映画祭）、宮内貴圭（東京大学教育学部付属中等教育学校）、山田恵子（自由学園）、渡邊明志（筑波大学附属聴覚）、和田恵子（日本オリンピックアカデミー）、国島栄市
　注）参加者は所属や肩書きを離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するために便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。ご本人の了解が得られた範囲で公開しています。
【報告書作成者】梅澤佳子

【目　次】

Ⅰ．大河ドラマ「いだてん」－スポーツ史考証の立場から（大林太朗）
　１．大河ドラマ「いだてん」との関連で
　２．スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」
　３．1964 年東京大会におけるオリンピック学習

Ⅱ．オリンピズムを教育に（中塚義実）
　１．金栗四三の母校：東京高等師範学校－蹴球部初代主将・中村覚之助をめぐって
　２．オリンピズムを教育に－国際・国内ユースフォーラムを中心に
　３．今後の課題－議論したいこと

【配布資料】

１．「サロン通信」2019 年 3 月号
２．特定非営利活動法人サロン 2002 広報誌「游 ASOBI」第 2 号
３．金栗四三青春の地・文京区企画展チラシ
４．「メトロガイド - 金栗四三のふるさとをたずねて」2019 年 4 月号

【大林氏の紹介・月例会の概要】

演者の大林太朗氏は、筑波大学体育系助教、同オリンピック教育プラットフォーム（CORE）の運営委員を務め、大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺」のスポーツ史考証に携わる研究者である。愛知県名古屋市出身。筑波大学体育専門学群、同大学院修了。現役時代の専門種目は十種競技。2011 年から約半年間、ギリシャ共和国のオリンピアに位置する国際オリンピックアカデミー（ペロポネソス大学大学院）に留学し、オリンピックの歴史を専攻した。金栗四三はじめ東京高等師範学校陸上競技部の DNA を受け継ぐ学究の徒である。

第 271 回月例会は、はじめに中塚氏より本月例会の趣旨説明があり、参加者が自己紹介を行った後、大林氏、中塚氏の講演と続いた。大林氏から「いだてん」の考証エピソードを交えて日本におけるオリンピック・ムーブメントの経緯が紹介され、同氏が現在 CORE 運営委員として推進に携わっているスポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピックムーブメント全国展開事業」の現状と課題が説明された。

最後に国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムへの引率をはじめ、オリンピック教育に深く携わった中塚氏から「オリンピズムを教育に」のメッセージの中身、現状と課題を伺った。

当初のプログラムにあった「2020 年の先にどうつないでいくか」については、時間切れのため中華料理屋「旺達（わんたつ）」に移動し意見交換を行った。「旺達」では、鈴木崇正氏から祖父の貴重な資料が紹介され、実質 4 時間にわたる充実した月例会であった。

Ⅰ．「いだてん」－スポーツ史考証の立場から（大林太朗）

１．大河ドラマ「いだてん」との関連で

※参加者の知識の足並みを揃えるために、まずは番組 PR 動画を視聴。

１）考証作業全般について

スポーツ史考証は、私の指導教官でもある真田久教授（筑波大学体育系）が主担当で、私は補助で関わっている。考証と言っても色々な役回りがある。一つは、体育・スポーツ史の研究者という立場からドラマに関する題材、エピソードとその根拠となる関連史料を提供することである。特に、金栗が学生時代を送った東京高等師範学校（現：筑波大学）に関する資料を多く提供した。二つ目は、脚本を務める宮藤氏の台本を読み、史料と照らして間違いがないか、時系列に矛盾はないか、などを確認することである。「ドラマ」という性格上、全てが史実というわけではない。時にはオリジナルな役柄や設定が創り出されることもある。

２）金栗の生活一般について

金栗は色々な本を書いており、それらを参考にしている。金栗は 1912 年のストックホルム大会から帰国後に『ランニング』（1916 年）と題する専門書をまとめている。その中で「冷水浴」については、以下のように述べている。

冷水浴は、主に朝起きてからやるが（略）、其の方法は冷水を急に頭からカブルよりもカブル前に、手でよいから頭から全身を一寸摩擦して次に冷水を頭からカブルのである（略）、次に一ニ分間瞑目して、無我の境に入り、それから又手で全身を擦り、次に干ける手拭で、十分全身を摩擦し之が終ってから全身の体操を数分間やるのである。之が済んでから衣服を着る（略）。

東京高等師範学校が舞台になるということで、筑波大学所蔵の資料を提供し、食堂や学生寮などのセットが制作されている。特に当時の卒業アルバムには、様々な写真が掲載されていて興味深い。寄宿舎の生活は、現在の「学生要覧」・「学生便覧」に当たるものが残っており、当時の様子を知ることが出来る。冬は午前 6 時に起床、6 時半から 7 時半までに朝食を摂る。その後、登校し勉学に励む。昼食は 11 時半から午後 1 時まで。そして夕食は午後 5 時から 6 時まで摂って、その後、黙習（=自習）の時間が 8 時から 9 時半、10 時に就寝。これをかなり厳密に守っていた。この睡眠について、金栗は次のように述べている。

一日の自己の為した行動を顧みて善悪を反省するのは大切であるが、それ以外所謂空想や、雑念に耽ってはならぬ、就床後は直ちに無我の境に入る様にし、若し直ちに眠られぬ人でもつとめて早く眠る様に習慣を付けねばならぬ（略）。扨て朝になって目覚めてから布団の中で雑念に耽って、いつ迄も起き出でずもぢもぢして居るのは最悪い、一度目を覚したならば、少し早くとも男らしく起き出でた方がよい、冬などは殊によい気持ちで目覚め乍ら布団の内の空想は、よくやるものであるが最新鮮な頭脳を雑念に耽らするのは、精力経済上最忌むべきではないか（略）。

これは大変興味深いところ。最近、朝起きるとこの文中にある「もぢもぢしているのは最悪い」という言葉がよぎってしまう。

３）ストックホルム大会に向けて

金栗は、1912 年ストックホルム大会出場について、あまり積極的でなかった。ドラマの通り、これは資料にも残っている。プレッシャー、経済的問題など色々な要素があったのだろう。しかし、ここで紹介したいのはその様子をみた嘉納治五郎の言葉とされる一文である。

身体、元気、気品を持ち、君の最善を尽せよ、最善を尽したる上の勝敗は男子の本懐なり。
…其は決して君の罪ではない。是れ偶々我国民の体力が、未だ世界列強の上に位するに至らぬを示し、却て我体育界を大いに奮励せしむる動機となるであらうから、所謂災を転じて福となすといふべきである。

この一文は、東京高等師範学校の校友会誌に掲載されたものである。嘉納の懐の深さが感じられる一文である。そのほか、校友会誌からは様々なエピソードが抽出されて、ドラマ上で描かれている。

※ここで筑波大学附属図書館所蔵の 1912 年ストックホルム大会マラソン競技だけを記録した写真集が紹介された。

４）オリンピックと教育に関して

金栗は 1924 年に「小学校における競技と指導法」を著した。ベルリン大会には出場できなかったが、アントワープ大会（1920 年）、パリ大会（1924 年）に出場、その頃の著作であるが、ここで特筆すべきことに、金栗自身のオリンピック、スポーツの教育的意義に関する記述がある。

オリムピック大会の模様などは殊に彼等の血を沸かしむるに力あるものである、或は技術の上からも、人物の点からも見ても模範として恥しくない、大運動家の逸事等は、児童の運動欲を一層そそる力がある、彼らは此の話を聞き、興味を生ずると同時に、自分も一つ彼の様な大運動家となって、日本に名を広め、世界の舞台に名をあげて一は自分の名誉の為め、一は日本帝国の名誉の為めにと大いに小さい胸を高ならすのである、その方法さえ誤らねば、最有効の教育となる

ここでは、オリンピックや著名なアスリートに関する話が子供たちを鼓舞することを述べている。また他の箇所では、フェアプレイに関する記述もみられる。これは十分に、現在のオリンピック教育に通ずる内容である。

２．スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

金栗四三を輩出した東京高等師範学校は、世紀を超えて現在は筑波大学となり、オリンピック教育プラットフォーム（CORE）という組織を立ち上げた。東京大会に向けて、スポーツ庁から「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」の委託を受けている。

１）本事業の経緯とこれまでの活動

「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」は、「2020 年東京大会の準備及び運営に関する施策の推進を図るための基本方針が閣議決定」を受けて始まったものである。2014 年の有識者会議において、全国にオリンピック・パラリンピック教育を広げる意義と方法が検討され、2015 年には「調査研究事業」として宮城県、京都府、福岡県、3 県の教育委員会と筑波大学で試行した。

2016 年からは「全国展開事業」と名を改め、いよいよ全国各地にムーブメントを広げていくことになった。大学だけでなく、組織委員会、JOC、JPC、その他の関係団体と共に「全国中核拠点会議」を構成

し、情報交換を行っている。今後は 2020 を迎えるにあたり、聖火リレー、ボランティア、その後の教育レガシーというところも具体的な議論になってくる。

２）各地域における教員研修会について

この事業では、各地域におけるオリンピック・パラリンピック教育推進校の教員研修会が行われる。事前研修会にあたる「地域セミナー」は、本学の教員からこの事業の背景と目的、具体的な実践例について紹介し、IOC が出している教材「Olympic Value Education Program」のツールキット、日本財団発行「I'mPOSSIBLE」、東京都教育庁「教材オリンピック・パラリンピック学習読本」などを紹介している。

もう一つは事後報告会にあたる「地域ワークショップ」。推進校間でのグループワークも実施され次年度に向けた成果と課題を共有するという場が設けられている。

３）各推進校におけるオリパラ教育の特徴

基本的には保健体育、体育の中での実践が多くなっているという状況であるが、図画工作・外国語・家庭科、音楽科、総合的な学習など、様々な教科、あるいは課外活動においても、地域の特色ある実践が展開されている。外部講師としてオリンピアン、パラリンピアンの講義を聴いて終わりということもあるが、その場合も地域ゆかりの選手を呼び、事前学習でその方の経歴・実績やエピソードを調べるなどの工夫がなされている。そのような実践が、東京のみならず全国における大会のレガシーとして位置づけられるようになることが期待される。

３．1964 年東京大会におけるオリンピック学習

2020 年東京大会に向けて東京都教育庁は「教材オリンピック・パラリンピック学習読本」を配布しているが、1964 年東京大会も同様に「オリンピック読本」という同様の冊子が全国に配布されていた。

※参加者は、大林氏の持参した実際の読本を手に、説明を聞く。

1962 年中学校向け、1963 年高等学校・青年学級向け、1964 年は小学校向けの冊子が配布された。

内容を大きく 3 つに分けてみると小・中・高と同じ内容が描かれている。先ずはオリンピックそのものに関する内容として、初めてアジア開催されるということで「そもそもオリンピックとは」ということから読本は始まっている。

2 つ目に「スポーツへのいざない」ということで、著名アスリートのエピソードが紹介されている。「友情のメダル」の話、人見絹江、ヌルミとザトペックなど話が掲載されている。また、中学生版では障害を克服してオリンピックに出場し、金メダルを獲得した努力の逸話もある。障がいのあるアスリートについても当時から着目されていたことは印象的なところ。

3 つ目、開催国一員としての心構えということで、これは 50 年経ってどう解釈するか難しいところであるが「公共心・公徳心」という言葉を用いて、マナーとおもてなし、外国人を迎え入れる心構え、日本人の自覚をもって迎える準備をしようということが描かれているところである。

その実践については、当時のメディアも大きく取り上げている。50 年前の大会においても社会の関心を集めて、あるいは政府としても省庁を超えて大々的に推進していたことがうかがえる。読本は各教育委員会に届けられ、その地域の特色を生かして編集されていた。関東近縁だけでなく、京都市、広島県、福岡県においても、読本・しおりがそれぞれの地域、聖火リレーのコース紹介などを含めたものが作成されていた。

一方で、当時のオリンピック学習は、世論調査によれば、オリンピックを国・地域同士の争いをあおるような影響があったことも示唆される。これはオリンピズムとは異なる方向といえるだろう。また、その継続性についても、課題が残る。このような歴史的な経緯をふまえて、2020 年の先の話を検討する必要があるだろう。

＜質疑応答Ⅰ＞

神谷：父親は、東京オリンピック時に目黒区在住で小学生か中学生であった。当時は抽選でオリンピックを観戦することができたそうである。前回の東京オリンピックでは、児童・生徒に観戦を含めてそのようなことをやっていたのだろうか？　また、父親も周りも体育が好きであったことと東京オリンピックは関係があるのだろうか？

大林：当時の児童・生徒が、学校行事の中でどのように競技を観戦したのか、もう少し調べてみないとわからない。一方で、「オリンピック国民運動」では、地域の美化運動、交通マナーの向上など社会道徳・社会教育面でも色々な取組みがなされていた。それがオリンピックへの参加という意味合いもあったかもしれない。

梅本：今回の大河ドラマ「いだてん」において、今日はオリンピックに関してコマーシャルベース、商標権やお金が絡む中、過去のオリンピックを扱うにあたり影響やせめぎ合いがあったのかどうか？

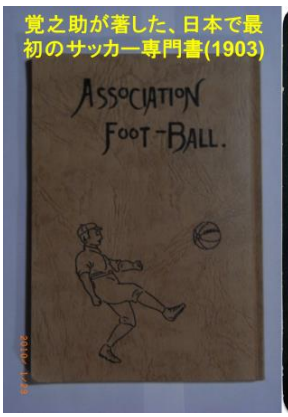
大林：その点については考証担当の方では不明、答えられない。ちなみに、1940 年の東京大会関係では、様々な書籍が出版される中に『オリンピックで金儲け』というタイトルのものもあった。

Ⅱ．オリンピズムを教育に（中塚義実）

１．金栗四三の母校：東京高等師範学校
ー蹴球部初代主将・中村覚之助をめぐって

日本で最初のサッカー試合は、1904 年 2 月 6 日、東京高等師範と横浜外人倶楽部（YC&AC）の試合である。注目すべきは、右の写真後列二人目初代主将、日本で最初のサッカーの専門書（1903 年）を著した和歌山県那智勝浦出身の中村覚之助である。

10 年ほど前、中村覚之助氏の故郷を探る旅に出て生家にお邪魔した。三本足の烏ーヤタガラスで有名な熊野のあたりである。因みに 5 月中旬に「日本八咫烏協会」が発足し、私も発起人の一人として当地に赴き記念講演をさせていただくことになっている。



中村覚之助の生家には、100 年前の東京高等師範学校の学生の貴重な遺品が遺されていた。全員が金栗に見えてしまいそうな（笑）学生たちの記念写真、博物学を専攻していた覚之助のノートもあった。ノートは

びっしり書き込まれており、100 年前の学生たちがどれほど勉強したかが伺える。

金栗氏の専攻は地歴であったが、中村氏は博物学を専攻、つまり体育専門学群ではないということである。卒業証書（嘉納治五郎校長）、校友会役員を務めた功労賞、蹴球部のみならず遊泳部においても優秀だったので初段を授与された証書、その他オーストラリアの新聞、雑誌などが遺っていた。那智勝浦で過ごす分には現金収入が要らないが、東京で勉学を続けるためには現金が必要である。覚之助の兄はオーストラリアに出稼ぎに行き、クリーニング屋を営んで現金収入を得て、弟、妹の学費を送金していた。先程、大林さんから明治時代の話、金栗氏の話にもあったが、地方から東京に出て勉学に励み、近代国家・日本の礎をつくっていこうという若者が東京高等師範学校にいたということである。

卒業證書

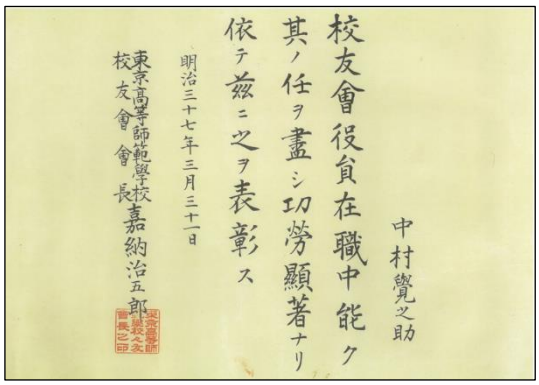
知多郡山海村
中村覺之助
明治十年六月生

右ハ本校本科博物學部ノ課程ヲ履修シ其ノ業ヲ卒ヘタリ依テ茲ニ之ヲ證ス

明治三十七年三月三十一日

東京高等師範學校長從四位勲三等嘉納治五郎

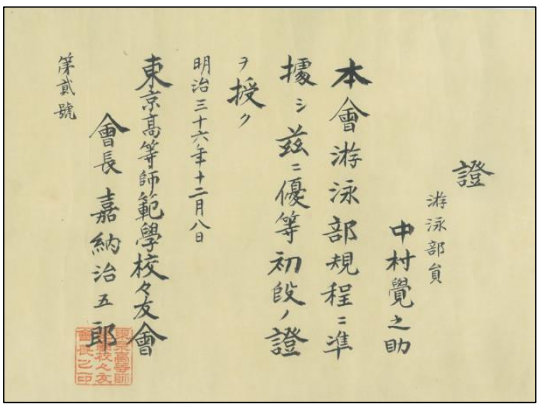
第五二號


校友會役員在職中能ク其ノ任ヲ盡シ功勞顯著ナリ依テ茲ニ之ヲ表彰ス

明治三十七年三月三十一日

東京高等師範學校
校友會會長 嘉納治五郎

中村覺之助


證

遊泳部員
中村覺之助

本會遊泳部規程ニ準據シ茲ニ優等初段ノ證ヲ授ク

明治三十六年十二月八日

東京高等師範學校校友會
會長 嘉納治五郎

第貳號

東京高等師範学校の卒業生は全国各地に赴いた。広島一中に赴いた松本寛次は金栗の時代に在籍していた先輩である。愛知県の刈谷中に赴任してサッカーの種を蒔いた高橋英治は金栗の同級生にあたる。この方のご子息は、1960～70 年代の日本サッカーリーグで「走る日立」の監督を（日本代表監督も）務められた高橋英辰である。

このように嘉納治五郎が長らく校長を務めた東京高師から、長距離走もサッカーも全国に広がっていった。金栗も、ここに挙げられた方々も、その一人なのである。

卒業後は全国各地へ！

明37(1904)　中村 覚之助→清国山東省済南府師範学堂
明39(1906)　堀　桑吉　→　愛知第一師範
明41(1908)　細木 志郎　→　埼玉師範
明41(1908)　牧野 信寿　→　広島師範
明41(1908)　内野 台嶺　→　豊島師範
明42(1909)　落合 秀保　→　滋賀師範
明42(1909)　玉井 幸助　→　御影師範
明44(1911)　松本 寛次　→　広島一中
大3(1914)　高橋 英治　→　刈谷中
大9(1920)　北村 春吉　→　静岡師範
昭7(1932)　河本 春男　→　神戸一中

「赴任地にゴールポスト！」を合言葉に、全国にサッカーを広めた東京高師は、「日本サッカーの宗家」です

※右写真にあるように、茗荷谷界隈にある嘉納治五郎の銅像、「金栗足袋発祥の地」の石碑等が紹介された。

２．オリンピズムを教育に－国際・国内 YF を中心に

１）オリンピック教育との関わり

2018 年度の NPO サロン広報誌『游 ASOBI』第 2 号に「オリンピズムを教育に」と題してメッセージを掲載した。何度か月例会でも話をしているが、「オリパラ教育」に関わる全国の方々が直面すると思われる話なので触れておきたい。

2010 年 12 月、嘉納治五郎生誕 150 年を機に筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）が発足した。その準備段階の同年秋ごろ、「オリンピック教育に取り組むので附属学校の取りまとめをやってもらえないか」と、当時の阿部生雄教育長（スポーツ史）から声をかけていただいた。ほぼ同時期に「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムに高校生を参加させないか」という話を国士舘大学の田原淳子氏よりいただき、私はいきなりオリンピック教育の当事者になり戸惑いを感じた。

スポーツが教育の呪縛から離れてようやく色々な角度から考えられるようになってきているのに、何でまた「スポーツ教育」「オリンピック教育」なのかという思いがあり、阿部教育長には、否定的・消極的であることを正直に申し上げた。いまではどっぷりつかっているが…。

学校の教員会議で「オリンピック教育に取り組む」ことを提案した。そのとき言われたのは、「それは何？」「選手育成のプログラム？」「エリート教育？」「オリンピック招致活動なの？(2016 年の招致活動の時期であった)」、そして「それは体育科でやればいいんじゃないの？教員全体でやることではないでしょ」ということであった。更に、国際ユースフォーラムに高校生 2 名を参加させる話をしたときには、「ただでさえ忙しいのに誰が引率するの？」と、決して好意的には受け止められなかった。恐らく、スポーツ庁のオリパラ関連事業を各自治体で展開する際、はじめは皆が経験していることだと思う。

私は右の資料にあるように、オリンピックの価値、オリンピズムを柱に据えた教育であると理解しており、本来の教育の姿を取り戻す営みであると捉えている。

「オリンピズム」とは？

◆クーベルタンが目指したこと ⇒ オリンピズム

・スポーツをすることで、身体と意志と心の調和のとれた若者を育成する

・異なる国や地域の人々とスポーツを行うことで、互いに相手を尊重し、自分とは異なる相手の文化や考え方を理解する（異文化理解・世界平和）

・スポーツによってよりよい人間が増えれば、社会がよくなり、国がよくなり、世界がよくなっていく⇒平和でよりよい世界の構築

◆オリンピックの価値（Olympic Values）

卓越（Excellence）、友情（Friendship）、尊重（Respect）

◆オリンピズムの教育的価値

①努力する喜び(Joy of effort)
②フェアプレイ(Fair play)
③他者への尊重(Respect for others)
④卓越さの追求(Pursuit of excellence)
⑤身体、意志、心の調和(Balance between body, will and mind)

＜パラリンピックの価値＞
Courage（勇気）
Determination（強い意志・決断）
Equality（公平・平等）
Inspiration（鼓舞）

国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム

第1回　1997年　ル・アーブル（フランス）
第2回　1999年　マッチ・ウェンロック（イギリス）
第3回　2001年　ローザンヌ（スイス）
第4回　2003年　アレンツァーノ（イタリア）
第5回　2005年　ラートシュタット（オーストリア）
第6回　2007年　ターボル（チェコ共和国）　…　日本に紹介
第7回　2009年　オリンピア、パリニ（ギリシア）…日本初参加
第8回　2011年　北京（中国）…筑附高から2名
第9回　2013年　リレハンメル（ノルウェー）…筑附高から2名
第10回　2015年　ピエスチャニ（スロバキア）…日本から7名
第11回　2017年　ウルヌルメ（エストニア）…日本から7名
第12回　2019年　マコン（フランス）　…日本から7名
第13回　2021年　日本開催?!←準備中　⇒キプロスに決定

２）国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム

世界中の高校生が 2 年に一度、一堂に会してオリンピズムについて学ぶ場である。私は第 8 回（2011 年）、北京で開かれたフォーラムから関わるようになった。北京四中は、アジアで唯一のクーベルタン・スクールであるが、これは北京オリンピックのレガシーである。オーストラリアはシドニーオリンピックのレガシーとして、州毎にユースフォーラムを展開しており、その代表が国際ユースフォーラムに参加するという仕組みである。他国の経緯を参考にしながら、2020 年の東京オリパラの翌年、2021 年の第 13 回大会を日本で開催しようと話をしていたのだが、つい最近、第 13 回はキプロスでの開催が決まった。

北京（中国）のフォーラムは世界中から百数十人の高校生が集まり、朝、日本であればラジオ体操のところ、太極拳から始まった。これも実技テストの一つである。

第 9 回リレハンメル（ノルウェー）のフォーラムには筑波大学附属高からたまたま剣道部員が 2 名参加した。各国のパフォーマンスで日本代表が剣道の形を披露し、世界中の参加者から東洋の神秘として受け止められた。

３）国内ユースフォーラムの提案と実践

2011 年に北京でのユースフォーラムに帯同した際に思ったのは、日本では既にオリンピック教育は十分になされているということである。むしろ日本ではスポーツが教育に利用されてきた歴史があり、敢えて「オリンピック教育」という必要はないと考えた。しかしながら、歴史や理念に関する教育は全く不十分であることを感じた。

2013 年リレハンメルに帯同した時は、何が日本で出来るかを考えた。日本の学校がクーベルタン・スクールになるのは現実的ではない。だが、クーベルタンや嘉納治五郎の思想は広めていきたい。そのために国内版ユースフォーラム（オーストラリア型）をやろうと考えた。日本人はシャイである。語学の問題だけでなく、日本国内においても交流が下手で、スポーツの試合も試合終了で終わってしまう。交流する機会を増やしたいと思い、2014 年 3 月に提案した（当日の配布資料 5 頁参照）。

参加できるのは高校生。全国 9 地域（各 30～50 名程度参加）で 2～3 泊程度の地域フォーラムを夏休みに実施。そこから選ばれた 30～50 名を春休みに集めて全国大会（3 泊 4 日程度）を実施。その中から 7 名を選考し、同年夏の国際ユースフォーラムに参加するイメージである。主な内容は「クーベルタン賞」（スポーツテスト、知識テスト、ボランティア活動、グループ討議、アートパフォーマンス）と「嘉納治五郎賞」（日本の歴史や文化など）及び「自然・交流活動」。最終的にはアジア諸国にも呼びかけるということを考えていた。

こうした構想が急に現実味を帯びてきたのは、2013 年 9 月、ブエノスアイレスで 2020 年のオリンピック・パラリンピックが東京に決定してからである。急にいろんなところが「オリンピック教育（のちに「オリパラ教育」）を言い出すようになり、我々の構想にも追い風が吹いてきた。そして 2015 年 3 月、初の国内ユースフォーラムを実施することができた。「クーベルタン-嘉納ユースフォーラム 2015」である。この参加者から、同年夏の第 10 回国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムへの派遣生徒 7 名を選考した。

※2015 年スロバキア、2017 年エストニア、2019 年第 12 回フランスで行われた内容（テスト、クロスカントリー、ディスカッション、アートパフォーマンス、障がいスポーツ体験する等々）の写真を見ながらフォーラムの様子が紹介された。

３．今後の課題 - 議論したいこと

（ 配布資料 2 頁 6 を参照しながら）

１）「オリパラ教育」とオリンピック教育

もともと「オリンピック教育」としてスタートしたが 2020 年のオリンピック・パラリンピックが東京に決定し、パラリンピックが厚生労働省から文部科学省に移管され、「オリンピック教育」が「オリンピック・パラリンピック教育（略：オリ・パラ教育）」という言葉が行政用語と

して定着した。

もともと「オリンピック教育」の「オリンピック」は競技会を指すものではなかった。オリンピズムのことを取り上げていた筈なのに、「パラリンピック」という競技会名がついてくることで、「オリンピック」も含めた「2020 年」向けの期間限定・競技会志向の短期完結型プログラムとなりはしないか。2020 年が終わった後、どうなるのだろうか、という疑問が改めて感じられる。本日は特別支援教育に携わる教員も参加しているが、「パラリンピック」が前面に出てくると、たとえば聴覚障がいの「デフリンピック」や知的障がいの「スペシャルオリンピックス」などが隠れてしまわないかという懸念もある。筑波大学でオリンピック教育推進専門委員会が出来た時、このことはかなり議論した。そして我々は「オリンピック教育」でいこうということになった。この言葉の中に、他者理解も含まれ、障がい者の理解も含まれるという考えである。しかし行政用語が変わってくる中で「オリパラ教育」と言わざるを得ないというジレンマがある。

私見を言うなら「オリンピック教育」でよい。もっと言うならオリンピックも不要。「真の“教育”を取り戻せ」ということである！サロン 2002 のメッセージとして広報誌『游 ASOBI』第 2 号に載せた。

２）2020 以降に何を残すか

国際ユースフォーラムを主催する国際ピエール・ド・クーベルタン委員会（CIPC）の日本支部として、日本ピエール・ド・クーベルタン委員会（CJPC）がようやく設立された。今後の国際ユースフォーラムへの派遣母体は CJPC となるが、設立されたばかりで財源も何もない。今後、この組織がどのようになっていくか、どのような形でリーダーシップをとっていくのかが課題である。2021 年の国際ユースフォーラムはキプロスに決定したが、2020 年のホスト国であった日本開催を 2023 年、2025 年…目指したい。

そのためにも国際ユースフォーラムの開催を視野に入れ、いわゆる「オリパラ教育」に携わる諸団体の連携をしっかり進めていかなければいけないと考える。また、国際ユースフォーラムの前段として、アジア・太平洋地域でユースフォーラムを開催し実績を作りたいというのが CIPC 副会長でもある田原淳子氏のご意見である。

スポーツ庁「オリパラ教育全国展開事業」の行方であるが、2020 まではやるけれど、それ以降は恐らく予算はつかないだろう。だからといってこれをなくしてよいものか。全国高体連（高等学校体育連盟）は有力な担い手となろうが、なかなか「大会屋さん」から抜け出せないでいる。私は全国高体連研究部活性化委員長を 10 年も務めているが、研究部がこの問題に深く関わり、スポーツの本質、教育のあり方を発信していく必要があると考える。

時間はあまりないが、2 次会も含め、この機会に皆さんと議論したい。

＜質疑応答Ⅱ＞

参加者：オリンピック教育におけるアマチュアリズムの話は特に出なかったが、何かあるか？

中塚：例えば、筑波大学附属高校におけるオリンピック教育として「体育理論」の授業がある。私の授業ではアマチュアリズム、プロフェッショナリズムは当然取り上げている。近代オリンピックは、クーベルタンが英国のパブリックスクールにヒントを得たということもあり、オリンピックはアマチュアの競技会であったという歴史の勉強がある。加えて、そもそもアマチュアリズムとは何か、プロとは何かということを話している。それはキャリア教育にも通じる。生徒はさまざまな道のプロになって行くわけで、芸術のプロはどんな人？　医者のプロは？　アマチュア医師は？こういうことを考えさせる題材としている。

参加者：スポーツの現場からみてアマチュアリズムというものを子どもたちが額面通り受け取れない、

イメージが湧かないのではないか。いつからそうなったのか、その底流に何があるのか等々は、素材として難しくなっているのではないか？

中塚：我々が当たり前と思っていることが、生徒たちにとって当たり前ではなくなっている。「東西冷戦」といってもピンとこない。学校教育全体で取り上げて行けた方がやり易いのかもしれない。

参加者：今の話に関連して、手法は様々であると思うが、子ども・学ぶ側はどのような経験でどのような認識が生まれるのか？　どのようなことによって成果が出てくるのか？　それが、中塚先生が仰った「真の教育」につながるのだろうか？

中塚：肌感覚で「このままではいかんぞ！」という危機感は凄くある。今回配布した『游 - ASOBI』第 2 号「サロン 2002 からのメッセージ」に載せたふたつのメッセージ、「オリンピズムを教育に」と「ユース年代にリーグ戦を」に繋がっている。リーグ戦というのは、自分たちがちゃんと遊ぶための仕組みであって、「自分の遊びくらい自分で支えろよ。考えてやれよ。」ということなのだが、その遊びが滅茶苦茶下手になっている。自分のことを自分で出来ない。こういう状況の中で、どのようにしていけばよいのかということを考えている。自分たちで自分たちの遊びを作りあげられる人になってもらいたいという思いがある。そういう人は仕事もできるのだろう。

参加者：そこの積み重ねがなかったからこそ、教育がブレブレになっているのかなと思う。結局、教師によって変わってしまっているという印象を受けていたので聞きたかった。

中塚：敢えて「真の教育」と言っているが、「どの大学に何人入った」といった学校の評価とか、テストの点がどうだったとか、甲子園を始めとするスポーツで結果を出したとか、そういうことばかりで、何れも教育の本質からはズレていると思う。そこでこの機会に「真の教育」とは何なのか、というところを皆で確認し合うことが、2020 年を機に一番やるべきことであり、やり易いことでもあると思っている。あとに遺していくレガシーである。

梅澤：本日、サロンにお集まりの方々とこのようなお話しが出来る、このような機会は日本のスポーツ全体からするとまだ少数派であり貴重であると感じる。私自身が教育の現場にいて、サロン 2002 が考えているような“理念”を伝えることに大変苦労している。親との相互理解はさらに大変である。私たちの伝えたいスポーツの価値を伝えるのに物凄い時間と労力をさいているが心折れずに頑張りたい。

岸　：大河ドラマ「いだてん」は、教育的なメッセージを伝えようと考えたりしているのだろうか。

大林：時代考証をチェックする係なので何とも申し上げられないが、冒頭で申した通り、凄く大きな挑戦をしていると思う。戦前と戦後をつなぐ、戦争を描くという中で、教育と共に変わったスポーツが、それを繋ぐ架け橋として描かれているという中では、恐らく視聴者側が色々な事を汲み取るのが良いのかと思う。例えばストックホルム大会で負けた金栗選手に対して京都大学の田島先生（スポーツ関係者以外）は世間の声を代弁して責めるのだが、スポーツ関係者は実は誰も責めていない。「大丈夫だったか」、「どこにいたのか」と声をかけている。そんなところからもアスリートに対する周囲のプレッシャー、勝つことだけを求める風潮を、もしかしたら暗に批判しているのか、メッセージが込められているのかと邪推してしまうところである。そのようなところ

からスポーツに対する考え方が見えるのではないかと思う。

清水：パラリンピックサポートセンターに派遣で行っている立場で活動をしている。昨年 9 月からこの 3 月まで全国各地 50 校近くの小中高を回っている。現場の方々は、地方に行けば行くほど「やらされている感」満載で困っている。これまで教育委員会が主となっていたものがオリパラ推進室に移管して担当者が変わったりする歪みを感じる。情報がバラバラで大変そうである。

大林：地域、県によって担当部署が教育委員会の保健体育スポーツ課、県知事部局のオリパラ推進室などバラバラなのは事実である。ごく一部ではあるが、それらがうまく連携して地域活性化と学校教育の連携がなされているところもある。そのようなモデルを大学としては吸い上げて、来年度以降、地域のモデルにしたいと考えている。

中塚：今年度、国際ユースフォーラムに参加される山田先生からひと言。

山田：本日、大林先生から「いだてん」について改めて伺い、ドラマの中にちりばめられている当時のスポーツに対する考え方や思いを再確認することができた。金栗に対する嘉納先生の励ましであったり、ドラマの中の言葉は色々なメッセージを、現代の私たちに伝えてくれているのだということが分かった。日本のスポーツと欧米のスポーツの架け橋になるユースフォーラムに、子どもたちと参加できることを光栄に思う。また引率者としてどのような事を学び、皆さんにお伝えできるか、私自身も更に学んで大会で色々な事を吸収しお伝えしたいと思う大切な時間であった。

中塚：毎回、引率された方には 9 月のサロン 2002 で報告していただくことになっているのでご準備の方をお願いしたい。大林さん、最後に。

大林：この度の準備の過程で、現在携わっている「いだてん」のこと、スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」について重ねて考える機会を持つことが出来、大変良い勉強になった。

【月例会補足】

＊金栗四三（かなくり　しそう）1891（明治 24）年 8 月 20 日‐1983（昭和 58）年 11 月 13 日（92 歳没）。熊本県和水町出身。身長 163 ㎝。マラソン選手。1911（明治 44）年、ストックホルムオリンピック大会マラソン予選会に出場。マラソン足袋で当時の世界記録を 27 分も縮める大記録を出し、短距離の三島弥彦と共に日本初のオリンピック選手となる。高等師範学校卒業、東京府女子師範学校教師（地理）を務めながら現役選手としてトレーニングを続ける。1920（大正 9）年アントワープオリンピック、1924（大正 13）年のパリオリンピックにも出場。マラソンで 3 度オリンピック大会に出場した。1917（大正 6）年駅伝の始まりとされる東海道駅伝徒歩競争の関東組アンカーとして出走。1920（大正 9）年、第 1 回東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）が開催され、金栗もこの大会開催のために尽力している。3 度のオリンピック参加を通じてスポーツ振興の重要性を痛感し、女子体育の振興にも尽力している。ゴム底の「金栗足袋」の開発。高地トレーニングの導入。

＊高橋英辰（たかはし　ひでとき 1916 年 4 月-2000 年 2 月）
福島県福島市出身。サッカー選手、サッカー指導者。サッカー日本代表監督を務め、2009 年に日本サッカー殿堂入りした。

以上